

2 日本文化の総合性

ところで、それらはたんなる寄せ集めの雑居（混在）文化ではなく、おのずと調和のとれている場合が多い。このような総合性こそ日本文化のいま一つの特徴であり、より重要なことといえよう。

たとえば、土代においても、貴族官人たちの多くは、儒教の教養を身につけ、仏教にも深く帰依しているが、公的には何より神道の祭祀を重んじて、もし同じ日に儒教や仏教の行事があれば、それを遅らせている。また天皇の就任にさいして、儒教的な即位式（文武百官への即位披露）や、仏教的な大仁王会（護国祈願の講經）だけでなく、より以上に神道的な大嘗祭（皇祖神と新天皇との共食、神事）がもつとも重んじられてきた。つまり、神儒仏の關係は、たんに混在していたのではなく、おのずと軽重があり秩序があつて、全体的に調和が保たれ融和もなされてきたのである。

もう一例あげれば、今では神道に属すると考えられている七福神の信仰も、よく調べてみると、おもしろい。日本古来の神は恵比寿だけであつて、その他の大黒天・毘沙門天・吉祥天・弁財天は、いずれも元来インドの仏教を守る神である。また布袋は

中国に実在した禪宗の僧侶であり、福祿寿も中国の道教の神にほかならない。しかし日本では、インドの神とか中国の神とかいう区別を立てず、われわれの幸福を守つてくれる庶民の神として、おおらかに信仰されてきたというのが実情である。

このように日本人は、儒教だけでなく、仏教も道教も、あまり抵抗なくとり入れてきた。しかも、それらを、いつのまにか日本の風土に合うように変えてしまつて、在来の民族信仰と在地の民間習俗と不離一体のものにして例が少なくない。

では、このような文化の多様性・総合性は、どうして可能になったのであろうか。これを思想の面でいえば、まず第一に、日本古来の神道にみられる寛容性があげられる。いわゆる古神道は、縄文から弥生にかけて自然に生成発展をとげてきたもので、日本人の心にもつとも深く根ざした精神基盤といつてよいであらう。それは特定の教祖や教義にとらわれないから、外来の思想文化も柔軟に、むしろ積極的

に受け入れてきた。また、第二としては、大陸伝来の儒教や仏教の適応性もあげ

る必要がある。また、第二としては、大陸伝来の儒教や仏教の適応性もあげ

る必要がある。また、第二としては、大陸伝来の儒教や仏教の適応性もあげ

必要があろう。儒教は本来、現実的な思想であり、仏教も一面、多神教的な宗教であつて、ともに神道とかならずしも矛盾しない。

さらに第三には、日本人の旺盛な進取の気性と消化応用の能力があげられる。たと

えば、中国から漢字を学ぶと、万葉仮名によって古来の大和言葉をあらし、やがて

漢字から簡単な表音文字の片仮名や平仮名を發明することにより、日本独自の漢字・仮名まじり文をつくり上げた。しかも、それが一部の貴族や武家だけでなく、ほとんどの一般庶民にも普及している。

このように日本文化をみてくると、その特長としてあげられる多様性も総合性も、基盤になるものとして日本古来の発想・思考があり、その上に花咲いた特性といつてよいであろう。古来の神道的な考え方によれば、人間はたんなる個人として「生きてゐる」のではなく、むしろ時間的に祖先から子孫へとの繋がりのなかで「生かされてゐる」存在にほかならない。

さらにいえば、人の魂は肉体の死後も生きつづけ、やがて祖霊として子孫を護り通すという「靈魂不滅」の考え方や、天地自然のあらゆるところに神々の生命が宿っているという「万有生命」の考え方も、まさしく神道に根ざすものと考えられる。

したがって、それを素朴に信じた古来の日本人は、一方で家族的な人間関係を、他方では自然との調和を、何よりも重んじてきたのであり、それゆえに、祖先や自然の恩恵を「お蔭様」といつて感謝し、また生活共同体の対人関係も「お互い様」といながら助けあつてきたのであろう。